

「英語落語」が授業にやってきた —中学校検定教科書における使用例を考察する—

国際英語学科教授・学科長 藤澤良行

1 「英語落語」と中学校検定教科書（初期段階）

「英語落語」が世に認知されたのは上方落語家の桂枝雀とHOE英会話学校の校長であった山本正昭（二人とも故人）の協働作業による英語落語公演を先駆とする。落語を英語で演じることで、落語そのものの可能性を広げると共に、「英語落語」が英語教育のために応用ができる可能性をもたらした。

この流れを踏まえて、「英語落語」の中学校検定教科書への導入は、平成14年度から施行された中学校学習指導要領に基づく *New Horizon English Course 3*（東京書籍）に取り上げられたことを皮切りとする。この教科書では日本文化の紹介に関して、3年生版の早くから「湯飲み」「三味線」など日本独特のモノを英語で表現する活動を取り上げており、さらにUnit 4 “An American Rakugo-ka”において、メインの教材ページでアメリカ人落語家ビル・クラウリー (Bill Crowley) の体験エピソードを小咄の形で取り上げている。またそれに続く “Listening Plus 4” のページでは、彼のインタビューを聴き、その要点をメモする練習が置かれている。この課のねらいとしては、「ジェスチャーなどで工夫して意味を伝える」とあり、落語家が扇子や手拭いを使いつつ色々な所作を交えながら落語を演じるところから、ジェスチャーをつかったコミュニケーションの重要性を学ばせることになっていた。

中学校学習指導要領が2012年から改訂となり、週3時間配当を原則とした旧課程が、いわゆる「ゆとり教育」からの脱却をはかる形として各学年週4時間配当に拡充された。これに合わせる形で各出版社が作成する教科書は内容、ページ数、使用語彙など大幅に増強され、その内容は「コミュニケーション」をより重視する方向に進んだ。

そのような流れの中で、2012年の新学習指導要領に準拠した検定教科書6種のうち、「英語落語」に関連する題材を取り上げたのは、旧課程では上に述べたように東京書籍 *New Horizon* だけだったが、新課程ではそれが3社に

増えたことは注目に値する。一種の流行の現れとも言えるが、それだけ「英語落語」の中学の授業における応用の可能性に着目された結果であるとも言えよう。

本小稿では、以下その3社のものを簡単に紹介し、それぞれの特徴や狙いに触れることで、中学校の授業に「英語落語」を取り入れる意義について考えてみたい。

2 *New Horizon English Course 3* (東京書籍)

先に述べたとおり、*New Horizon* は早くから「英語落語」に着目し、積極的に取り上げてきており、今改訂でもその流れを継承している。新版では“Listening Plus 4” (p.49)において、現役上方落語家の桂かい枝のインタビューを聞き取る練習をする形で扱われている。そこでは日本人落語家の桂かい枝がどうして「英語落語」をするようになったのか、また海外で「英語落語」を公演してみて日本と世界では笑いについてどのような違いがあるのかなどが語られている。なお巻末の「応用編」中の“Further Reading” (p.128)には“Ambassador of Laughter”というタイトルで、文化庁任命の文化交流使として桂かい枝が1年掛けて行った米国公演活動の様子や現地での観客の反応を描いた英文が reading material として掲載されているので、その部分とのリンクも考えて構成されている。

3 *One World English Course 3* (教育出版)

今改訂でより本格的に「英語落語」を取り入れたのは、この *One World* であろう。3年生版においては、Lesson 1から日本文化の紹介、たとえば日本の観光名所案内を英語で行う、あるいは日本文化を紹介する英文を書く練習をおこない、それを踏まえて“Lesson 3 Our First Rakugo in English”という課が登場する。

こちらにも桂かい枝が話題の中心で、設定としては彼が *One World* の主人公たちの中学を訪れ、生徒たちに対して海外での経験を語り、さらに『動物園 (Zoo)』という「英語落語」を演じる設定になっている。この噺は、ある男がとある動物園で少し風変わりな仕事に就き、大事に巻き込まれるストーリーである。目新しいのは、この「英語落語」のスク립ト (抜粋) が挿絵と共に6ページにわたり掲載されている点である。しかもその抜粋は単に落

語の一部ではなく、それをつなぐと一通りの「英語落語」になり得るように巧みに編集されているので、内容読解の reading のための教材としても使用できる。主人公の身に何が起こるのかという、話の展開を理解しストーリーの流れを追いかける読み物としても十分おもしろい。

さらに注目すべきポイントは、落語のオチ（下げともいう、英語で言う punch line）が空白になっており、その1行を生徒自身に考えさせる open-ended 形式にしたところである。もちろん『動物園』本来のオチは存在する（筆者は2つのバージョンを見聞きしている）が、「この落語のオチを想像して、英文をかいてみよう」（p. 37）とあるように、授業での writing 活動につながるように工夫がこらしてある。単なる和文英訳の練習問題ではなく、ストーリーの流れを踏まえた生徒なりの自由な発想を促し、それを表現活動につなげるものである。いろいろな発想が期待される部分である。実際の教室使用のために、桂かい枝自身が演じる DVD が用意されており、生徒たちはそれを見て『動物園』本来のオチを確認し、自分たちが考えていたものとの違いを考えるなど、ここにはさらに発展の余地がある。

またスクリプトがあるということは、自分たちで練習をして「英語落語」を演じる活動にもつながる。「英語で落語に挑戦しよう。教科書のパートごとにグループ内で分担を決めて、本文を見ずにひとりずつ演じよう。また、セリフによって声の大きさ、速さ、間の取り方に工夫して気持ちを込めてみよう。」（p. 29）という指示があり、まとめの表現活動として仕上げをすることになる。ここではグループ活動として芝居仕立てにして表現することを狙いとしているが、ただ「気持ちを込めて」という指示をするだけでは実際に表現することは難しいので、この活動にどれだけの時間を使えるのかは疑問が残る。一方、このスクリプトは生徒一人で「英語落語」を演じるためにも使用できる。「英語落語」を演じる時は、上下（かみしも）を表現するために、頭を右左に動かしながらセリフを話すことで人物の描き分けをする（筆者はこの音読法を「落語音読」と名付けている）。この6ページにわたる英文を暗記し、この音読練習を積み、「英語落語」として表現できるところまでいければ、英語学習としての効果は絶大であろう。少しハードルが高いかもしれないが、現場の教員の創意工夫のある協力体制でぜひチャレンジしていただきたい。

One World にはこの後 ‘Task’ として桂かい枝自身に関する英文記事を読

み、そのプロフィールをまとめる活動も組み込まれている。

4 *New Crown English Course 3* (三省堂)

New Crown も新機軸として3年生版で大きく「英語落語」を取り上げている。こちらには女性英語落語家で大学教員の大島希巳江が登場している。

大島のオーストラリアでの英語落語公演に、主人公の一人であるエマ(Emma)が友人ショーン(Shawn)と出かけ、そこで演じられた英語の小咄のスタリプトとともに、その後にショーンによる大島へのインタビューが新聞記事の体裁で reading material として取り扱われている。このインタビューで大島は海外での英語落語公演における経験を語っており、「笑わない日本人」というステレオタイプのイメージに反して、日本人が演じる「英語落語」がおもしろく受け入れられている様子を説明している。

この課のねらいとしては、「日本の伝統文化の発信」(p. 4)があり、「英語落語」を日本の伝統文化の代表として取り上げていることがわかる。また活動としては「インタビューをして、その内容を書いてまとめる」(p. 4)ことがあげられ、大島に対するインタビューを手がかりに、“Mini-project”(p. 30)として「先生にインタビュー」をすることを求めている。まず Listening でインタビューを聞き込み、どのような質問をしているのかを理解し、それを参考にして自分の学校の先生にインタビューをして、その先生の紹介記事を英語で書くところまでつなげる。「英語落語」を一つの手がかりとして、さらに発展させる活動へとつながっていると見えよう。

5 「英語落語」を授業に取り入れる(まとめ)

「英語落語」を授業に取り入れるポイントとして、大学で「英語落語」の授業を作っている立場からいくつかの点を指摘しておきたい。

まず英語を使った自己表現であるということ。教室での英語の音読練習がえてして機械的な棒読みで終わってしまうことがある。生徒たちは役割分担をして英文を読み合っても、アイコンタクトも間も考慮しないまま、ただ交互に読んでいるだけになりがちである。しかしストーリー性があり人間が生きている「英語落語」を持ち込み、情景をイメージしながら表現することで、音読する英語そのものに読み手の感情が乗ってくるように思われる。特に上下をつけながら心情を踏まえつつ声に出す「落語音読」は有効で、繰り返し

行いたいところである。

このように音読を重ねた上で、発表会としてクラス全体に対してパフォーマンスをすると、演じ手と観客の立場でより理解が深まる。近年レシテーション・コンテストに「英語落語」が取り入れられることもあるが、この点が重要なのであろう。

そして日本文化の発信のきっかけとなることを挙げておきたい。従来の受信に偏重されがちな英語学習から脱皮し、自分たちの文化を再発見し、その良さを英語で世界に伝えることの大切さがわかる一つのきっかけとなることを願っている。

最後になるが、教室に「笑い」を持ち込みたい。とかくギスギスしがちな教室現場に、笑いの風が吹き抜けることを望みたい。教室において真剣に一つのことに集中して打ち込むことは大切であるが、一歩引いた形で全体の中での自分を見つめることができるきっかけとなるのが「笑い」である。「Laugh and Peace!」の精神が教室に花咲けば「英語落語」を授業に取り入れる意義が十分にあろう。

<各教科書出版社のアドレス>

東京書籍 Eネット <http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/>

教育出版 英語サイト <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/info.rbz?nd=119&ik=1>

三省堂 英語ホーム <http://tb.sanseido.co.jp/english/index.html>